英雄たちの記憶

――ベッツィ・ロスとポール・リヴィアをめぐって――

和田光弘

Collective Memory of American Heroes/Heroines

Mitsuhiro WADA

世に語り伝ふること，まことはあいなきにや，おほくはみな虚言なり。あるにも過ぎて，人はものを言ひなすに，まして年月過ぎ，境も隔たりぬれば，言ひたきままに語りなして，筆にも書きとどめぬれば，やがてまた定まりぬ。

――徒然草，第73段

はじめに

南北戦争以前のアメリカ史において，最もポピュラーな人物といわれたら，誰を思い浮べるだろうか。ワシントン，リンカン，フランクリン…？ それでは，政治家・軍人を除いてといわれたら？ じつは，ここにひとつの興味深いデータがある。ニューヨーク州立大バッファロー校のアメリカ史概説のクラスで，同様の質問を，1975－88年に計8回おこない，結果を集計したものである。クラスの規模は40－270人で，のべ約1,000人が回答した。

さて，最初の問いに対する反応は，いわば予想どおりといえよう。第一位がワシントン，次いでリンカン，ジェファソン，フランクリン…といった具合である。しかしながら，二番目の問いに対する答えは，少なくともわれわれ日本人にとっては，かなり意外なものである。すなわち，第一位がベッツィ・ロス，第二位がポール・リヴィア，次いで，ジョン・スミス，ダニエル・ブーン，コロンブスなどとなっている。コロンブスはともかく，その他は，あまり聞き慣れた名前ではない。アメリカ人が――たとえ日本史専攻の学生でも――日本史のフォーク・ヒーロー――水戸黄門，大岡越前，石川五右衛門など――について，おそらくは全く無

知であるのと同様の事態，ともいえよう。本稿では，この第一位と第二位の二人の人物，ベッツィ・ロスとポール・リヴィアをとりあげ，何故，また，如何にして，彼女/彼がポピュラーな存在となり得たのか，詳しくみてゆくことにしたい。それは，アメリカの「建国神話」の形成過程そのものでもあり，そこにおいてわれわれは，アメリカ人の「集団記憶」のなかで変化する歴史的アイコン（イコン）の姿を，垣間見ることができるのである。

1．ベッツィ・ロス

（1） 星条旗伝説の誕生

このベッツィ・ロスという女性，とりわけ聞き慣れない向きが多いのではなかろうか。フィラデルフィアには，彼女の家を保存・公開した「ベッツィ・ロスの家」があり，AAA のガイドブックには，次のように説明がのっている。

> BETSY ROSS HOUSE, 239 Arch St., is where the famed colonial seamstress stitched the first American flag in 1776. The restored home is furnished in the middle-class manner of the period...

つまり，最初のアメリカ国旗（星条旗）を作った人物とされているのである。それゆえ，彼女の名は，アメリカ国民なら知らぬ者とてないのだが，一方で，正統な歴史書には，決してその名を見いだすことはできない。何故？ とりあえず，ブリタニカをめくってみよう。

> BETSY ROSS, woman who, according to tradition, made the first example of the present U. S. flag at the request of George Washington...

「伝説によれば」…？ 奥歯にものの挟まったこの言い方は，実は，民間伝承と実証史学の危ういバランスの上に乗っかっている。有り体に言えば，彼女が最初の星条旗を作ったなどというのは，まったくの作り話なのである。少なくとも，歴史学上，証明されていない「事実」である。では，いかなる理由で，かかるストーリーが語られるようになったのであろうか。彼女の経歴に関しては，ある程度詳しくわかっており（ベッツィ・ロス略年表参照），ポイントは彼女の夫にある。

1773年，フィラデルフィアでジョン・ロスと結婚したベッツィは，夫婦で室内装飾業を始め，大いに繁盛するが，折からの独立戦争の勃発で，夫は大陸軍に参加，戦死してしまう。健気に家業を続けるベッツィに，亡き夫の兄で大陸軍の優秀な軍人，ジョージ・ロスが白羽の矢

図1

図2

を立てた，というのである。ここからは，「伝説」の領域に踏み込む。いくつかのバージョンがあるが，大筋は以下のとおりである。かねがねアメリカ国旗の必要性を痛感していたワシントンは，ジョージ・ロスから，その制作に適任の者がいると聞き，ロバート・モリスと三人で，ベッツィの家へと足を運ぶ（図1参照）。制作を承諾したベッツィに，彼らは国旗のラフ・スケッチを示すが，その中の六芒星にかえて，彼女は五芒星を提案する。技術的困難を懸念する彼らを前に，ベッツィは鮮やかな手つきで五芒星を作り上げてみせる。彼らは納得し，そのデザインでベッツィは星条旗を縫い上げる。左上の部分に五芒星を円形にあしらった「ベッツィ・ロスの旗」の完成である（図2参照）。まこと愛国心を鼓舞するにふさわしいストーリーであり，学校のクラス劇などで，しばしば子供達によって演じられるというのも，いかにもアメリカ的で納得がいくが，このストーリー＝伝説には，実は「脚本家」がいたのである。

この伝説が，初めて歴史のおもてに姿を現したのは，独立革命から時代を下ること約百年，1870年のフィラデルフィアにおいてであった。ベッツィの孫，ウィリアム・キャンビーが，ペンシルヴァニア歴史協会において証言をおこない，11才の時，84才のベッツィに直接聞いたとした。さらに，キャンビーの叔母たちも，その証言を支持したのである。しかしながら，

文書のかたちでの証拠はなく，ただ，ベッツィと国旗に関して歴史的事実として確認されているのは，彼女がペンシルヴァニア邦のために，海軍の「旗」を作って，1777年5月に，14ポンド・12シリング・2ペンスの支払いを受けた，ということだけである。その旗のデザインも，今となってはわからない。W・キャンビーの死後，弟のジョージが，ワシントンに赴いて，懸命に兄の話の証拠探しをおこなったが，何も見いだすことはできなかった。このような経緯のなかで，歴史学者がキャンビーのストーリーに対して下した判断は，彼らベッツィの子孫たちを断罪するもので，彼らが，1876年の独立百周年記念式典へ向けて，観光客集めのために伝説を捏造した，というものである。1965年までになされた22点の研究のうち，15点がこの立場をとり，5点がわからないとし，わずか2点だけが，伝説が完全に否定されないかぎり，これを肯定する，としている。つまり，伝説捏造説こそ，今日，最も広く受け入れられている「学問的/科学的」見解といえよう。さて，それでは，星条旗の本当の発案者は誰なのか。ここで，少々回り道だが，星条旗の歴史を繙いてみることにしよう。

（2） 星条旗小史

植民地時代，政府の建物には，イギリス国旗がひるがえっていた。イングランドの聖ジョージ旗（白地に赤の十字）に加えて，1700年4月12日の国王布告で，スコットランドの聖アンドリュー旗（青地に白のX）も採用され，両者を合わせたGreat Union旗が，掲げられていたのである。しかし一方で，各植民地はそれぞれ独自の旗も創っており，これが独立革命の初期に用いられた。やがて戦線が拡大してゆくにつれ，十三植民地共通の旗の必要性が叫ばれ，出来上がったのが，いわゆる大陸旗Continental Colors（Great Union Flag, Grand Union Flag）である（図3参照）。左上（カントン）の部分にイギリス国旗をあしらい，13の赤と白のストライプ。このストライプは，「自由の息子たちSons of Liberty」の旗のデザインが，そのまま

図3

採用された。大陸旗は，1776年1月1日，マサチューセッツのプロスペクトヒルで，初めて，ワシントンによって大陸軍に示された。しかし，7月4日の独立宣言後は，イギリス国旗をあしらったカントンの部分が不評となり，新しいデザインが求められるが，その決定は先送りされる。ひとつには，大陸旗は，いわゆる「戦旗」ではなく――各部隊はそれぞれの旗を持っていた――，もっぱら，海上での敵・味方の識別や，砦に掲げるなどの用途に限定されていたことによる。つまり，今日と異なり，当時は，国旗は必ずしも国家のアイデンティティ確立に不可欠のものとは，考えられていなかったのである。むしろ今日の国旗の役割を担っていたのは，国璽 official seal of state で，これの制定委員会は独立宣言直後につくられ，現在の1ドル紙幣裏面にあるデザインを制定して，大陸会議発布の書類に印し始めた。かかる状況下で，新国旗制定を特に強く主張したのは，海軍御用達のフィラデルフィア商人と，旗による識別と一種の呪術性とを必要としたインディアンであった。インディアン，T. Green からの要請が，1777年6月3日に大陸会議で示され，11日後，6月14日（現在の Flag Day）に，海軍関係決議の一つとして，新国旗が制定された。

> RESOLVED: that the flag of the United States be made of thirteen stripes, alternate red and white; that the union be thirteen stars, white in a blue field, representing a new constellation.

星のデザインや，縦・横の比率について，この文章は詳らかでない。はたしてこの決議は，図2のタイプ（仮にベッツィ・タイプと呼ぶ）を意味していたのだろうか。じつはこの決議以前に，ベッツィ・タイプが使われていたという証拠は何もなく，これ以後も，ベッツィ・タイプが必ずしも広く用いられたというわけでもない。星のアレンジには，いくつものタイプがあり，かなり錯綜して使われていたらしい。しかも，南北戦争までは，国旗は“stripes and stars”と呼ばれ，stars よりも stripes の方が，意味が大きかったのである。にもかかわらず，ベッツィ・タイプは，当時，大陸会議が暗黙裏に認めていた唯一の国旗であったと考え得る証拠もあり，これをデザインしたのが，フィラデルフィアの法律家・政治家の Francis Hopkinson であったというのも，今日，半ば定説化している。彼は，万能人型の多才な文人で，彼一人がデザインしたのか，彼を中心とする委員会が制作したのか定かではないが，とまれ，ベッツィではなく，ホプキンソンこそが，いわゆる「最初の星条旗」の発案者だったらしいのである。

しかし，そもそも当時の状況からして，同じ国旗へ一斉に転換するなどということは不可能で，もっぱら用いられた海軍ですら，三色旗も同時に使われていた。陸軍ではほとんど使用されず，主に用いられたのは，カントンに国璽をあしらった図4のタイプであった。いや，海軍と陸軍とが同じ国旗を掲げるという発想自体，かなり後のものなのである。民衆への浸透・普

図4

及は遅々として進まず，新聞による情報提供も遅れがちであった。つまり，18世紀の星条旗は主に軍事用――特に海軍――だったが，それすら徹底してはいなかったのである。しかし，19世紀に入ると，しばしば愛国的な歌や文学などに顔を出すようになり，南北戦争で，いわゆる「市民宗教」の最高位に登りつめる。そして南北戦争後は，退役軍人会や各種愛国団体，子供向け雑誌などで「国旗の聖化 the cult of the flag」運動が展開される。1880年代から20世紀初めにかけて，国旗は公立学校に置かれ，Pledge of Allegiance で讃えられるようになるのである。第一次大戦後の1923年，米国在郷軍人会などの働きかけで，Flag Code がつくられ，ここで，縦・横の比率や，星のデザインが確定された。これ以降，今日に至るまで，星条旗のデザインの原則は変わらず――もちろん星の数は増えるが――，完全に同一の星条旗が，人々の愛国心の中枢部に位置することになるのである。

（3） アイコンとしてのベッツィ

さて，以上のような歴史学による断罪にもかかわらず，何故ベッツィは，今日，かくもポピュラーな存在であり続けるのか。「ベッツィ・ロスの家」は，shrine として，何故，いまだに多くの観光客を集め得るのか。それはいわば，歴史的事実/非事実を超えた問題である。ベッツィは，アメリカ国民にとって，歴史上の人物である以前に，「国旗の聖化」が生み出した，政治的団結の一種のシンボルなのである。伝説は「建国神話」の一部となり，ワシントンを国父とするならば，ベッツィは，星条旗という国のシンボルを生み出した母なるイメージを喚起する。ごく普通の女性であったベッツィのもとへ，父なる神＝ワシントンが訪れて，聖なる旗を生み出す媒介役とした。つまり，アメリカ人にとって，ベッツィは聖母マリアですらある。

ここで再び，図1を見てみよう。そもそもこの絵は，“Birth of Our Nation's Flag” と題

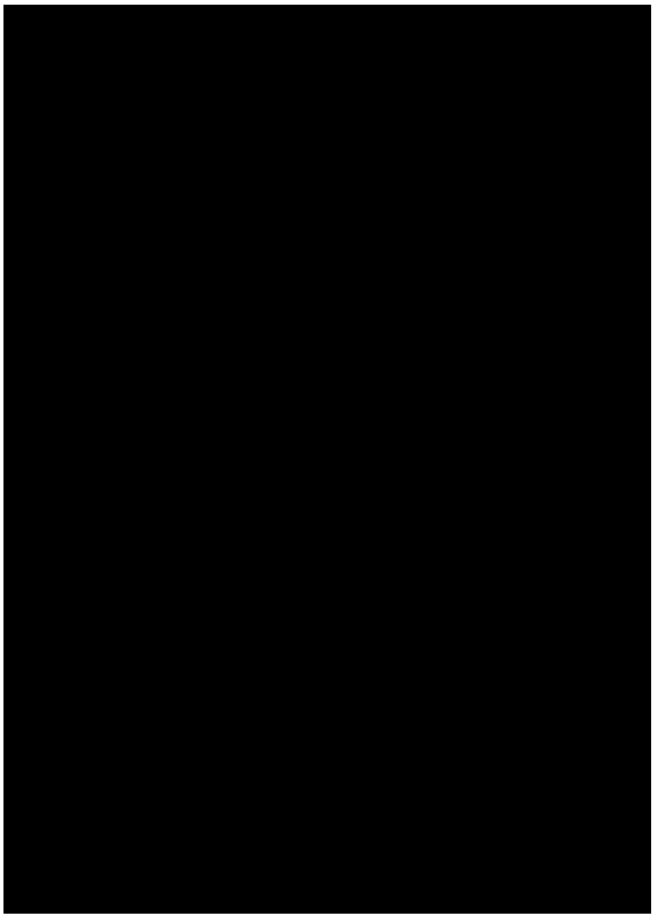

図5

され，1893年の“Chicago World's Columbian Exposition”に出されて，大好評を博したものである。作者のC. H. Weisgerberは，この成功に気を強くし，“American Flag House and Betsy Ross Memorial Association”なる団体をつくって，「ベッツィ・ロスの家」の買い取り・復元のための募金運動を開始する。10セントを支払えば，誰でも会員になることができ，会員証には，この絵がカラーで刷り込まれた。かかるシステムで，10万ドル以上の募金が集まったが，これはすなわち，100万枚以上の会員証，そしてWeisgerberの絵が，全米各地に広まったことを意味する。フィラデルフィアに誕生したベッツィの伝説は，全国に「普及」したのである。実のところ，Weisgerberの絵は，聖書を視覚化したイコン（聖画像）のごとく，ベッツィの伝説を視覚化し，キリスト教文化圏にある者にとっては，非常にわかりやすいメッセージを放っていた。今一度，図1を見てみよう。日の光を受けて，生まれたばかりの星条旗を抱くベッツィを囲む三人。何故，三人？　そう，彼らは東方の三博士でもあるの

だ。このように，イコノロジー（図像学）の観点から見たとき，この絵の象徴化機能は明白となる。かくして，ワシントンと並ぶ聖なるイメージに祭り上げられた普通の女性ベッツィは，やがてそのアイコン（イコン）のみが一人歩きを始める。ただし，このアイコンは，一定の文化的枠組を踏み越えない。それゆえ，その枠の外にいるわれわれ外国人にとって，図5の広告の図像は，意味をなさないのである。

集団記憶のなかでの，アイコンの力。ベッツィのストーリーは，歴史的事実でないもの（＝史料によって実証できないもの）の歴史的役割の大きさを，われわれに示してくれる。いや，そもそも歴史認識・歴史把握というものは，実際には，人々の集団記憶・意識のなかでの，様々なアイコンの展開に他ならないのではないか。そうであるならば，「民衆」こそがアイコンの操作・組み替え作業を担っているのであって，歴史学者も，「過去の忠実な再現」を超える勇気を持たなければならないのだ，ともいえよう。

2．ポール・リヴィア

（1） 真夜中の疾駆

前述のアンケートで，第二位にランクされたポール・リヴィア。彼は，わが国で書かれたアメリカ史の書物にも必ずといっていいほど顔を出す，いわゆる歴史上の人物である。ボストン美術館所蔵の，画家コプリーの手になる有名な肖像画（図6）は，彼に銀ポットや細工道具を配しているが，これはリヴィアの本業が，銀細工師だったことを示している。この時，彼は

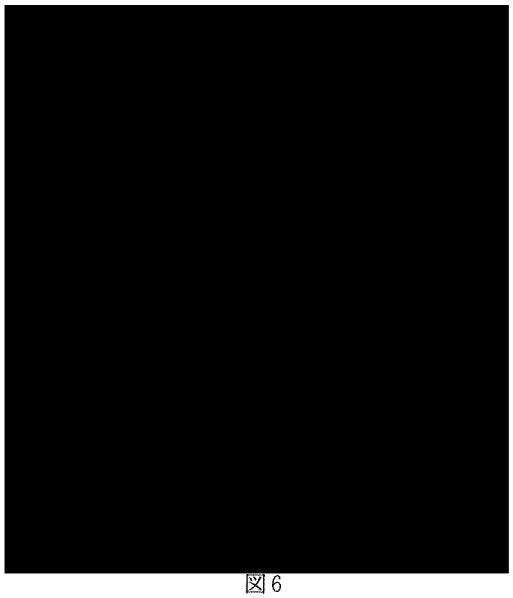

図6

33才（ポール・リヴィア略年表参照）。愛国派として頭角を現しつつあるとはいえ，未だ銀細工師以外の何者でもなかったのである。しかしこの後，彼が40才の時，その名を不滅のものとするひとつの事件がおこる。ポール・リヴィアのミッドナイト・ライド，真夜中の疾駆である。後の歴史は，この事件により，彼を建国の英雄に仕立て上げてしまう。彼が英雄へと祭り上げられる過程は，あとで詳しく述べるとして，まず，真夜中の疾駆について見てみることにしよう。

じつはこの事件，直接の史料と呼べるものは，3点しかない。（1）レキシントンの戦いにおける最初の発砲者を確定するため，マサチューセッツ議会がおこなった聞き取り調査でのリヴィア自身の発言記録。いわゆるDeposition of 1775。ただしこの記録は，戦闘に関する言及がほとんどなかったため，調査報告書には採用されなかった。（2）マサチューセッツ歴史協会の友人，J・ベルクナップに宛てた，リヴィアの私信。日付は1798年1月1日で，リヴィア63才。事件から23年が経過していた。（3）E. Phinney, *History of the Battle of Lexington on the Morn of the 19th of April, 1775*（1825）での，レキシントンの戦いの生き残り2人の証言。以上，3点である。したがって，（1），（2）がリヴィア自身の手になる直接の史料，（3）は間接の史料である。この（1），（2）については，完全なテキストが手元にある。Morisonの論文が両者を収録しており，O'Brien編集の本（500部の限定出版）も，（2）のファクシミリと，それを活字におこしたものを掲載している（参考文献参照）。以下，この（1），（2）の史料を対比させながら，また，概説書等の情報も援用しつつ，真夜中の疾駆について詳細に見てみよう。

そのストーリーは，1775年4月18日火曜日の夜，10時頃から始まる。リヴィアは，保安委員会議長で友人のJ・ウォレンから指令を受け取る。それによれば，イギリス軍が行動をおこし始めており，その目的は，レキシントンに滞在しているJ・ハンコックとS・アダムズを逮捕し，さらに，コンコードの武器貯蔵庫を破壊することにあると思われるので，この情報を直ちに両名に知らせるように，とのことであった。リヴィアはとりあえずウォレンの家へ駆け付けるが，そこで，もう一人の使者，ウィリアム・ドーズが，陸路，レキシントンへ向かったことを知らされる。リヴィアも別路でレキシントンに向かうべく，直ちに出発の準備を始めるが，じつは2日前の日曜日，かれは，あらかじめ注意を促す警告を，ハンコックとアダムズに伝えており，その帰路，友人たちと，いざという時のために，秘密の合図を考案していた。もし，イギリス軍が海を渡ってきたならば，（オールド）ノース教会の塔のうえにランタンを2つ，陸からならばランタンを1つ，と決めていたのである。この手配をウォレンに頼むと，彼は2人の友人とともに，密かにボートを漕いでチャールズ川を渡り，ボストン対岸のチャールズタウンに着く。そこで別の友人たちと合流するが，彼らによればランタンの合図は2つだったとのこと。リヴィアはD. Larkinの馬を借りて，直ちに「真夜中の疾駆」を開始する。11時頃で

あった…。この有名なランタンの合図，じつは（2）の史料には出てくるが，事件直後の（1）の史料には，一言も触れられていない。のみならず，（1）のなかで，ウォレンが出した指令の内容には，"...where was a number of Boats to receive them" との文言があり，これから判断するかぎり，ウォレンらはすでに，イギリス軍が海からくることを知っていたことになる。海から，とは，チャールズ川もしくはボストン湾を横切って，近道でチャールズタウンに上陸するルートである。それでは，ランタンの合図とは，何のためのものだったのだろうか。研究者の解釈では，万が一，リヴィアかドーズがイギリス軍に捕まった場合の合図で，他の使者をたてるようにとの意味合いだったとされている。また，ランタンを吊した人物に関しても，2説ある。リヴィアの友人 J. Pulling という説，ノース教会の寺男 R. Newman との説，である。しかしこれに関しては，Newman 説が正しいようである。Newman は，やはりランタンの灯を見つけたイギリス軍によって調べられたが，口を割らず，最終的に釈放されたことがわかっているからである。一方，Pulling は，変装して，いち早くボストンを脱出していたのである。

リヴィアがウォレンの家からいったん自分の家に戻り，2人の友人とボートに乗り込むまでの間の逸話・伝説も，2点ある。どちらも（1），（2）の史料には出てこない。ひとつは，ボートのオールを剝出しのまま運んでいた3人に，ある家の窓から，脱ぎたての羊毛のペチコートが投げられ，このコートでオールを包んでイギリス兵の目を避け，無事にボートまでたどりつくことができた，という話である。これについては，どうも実証可能であるらしい。いまひとつの逸話は，ボートにたどりついたリヴィアが，拍車を持ってくるのを忘れたことに気づき，愛犬の首輪に伝言をくくりつけて放ち，しばらくして犬が拍車をくわえてリヴィアのもとに帰ってきた，というものである。これは時間的にかなりの無理があり，リヴィアの子孫の主張にもかかわらず，どうも眉唾らしい。

とまれ，真夜中の疾駆に話を戻すならば，リヴィアは，ケンブリッジへと向かう道が，2人のイギリス兵によって遮られているのを知り，メッドフォード方面から回り道で，レキシントンへと向かう。史料（2）によれば，途中，大声で家々に警告を発したとされており，概説書にもしばしば "The British are coming!" とのリヴィアの警告の文句が記されているが，この話も，史料（1）には出てこない。ある研究者によれば，そもそもリヴィアの行動は穏密情報活動であり，イギリス兵に聞かれる可能性のある行為をするはずがないと，この警告に関しては否定的である。史料的に唯一，証明されている警告の文句は，史料（3）の W. Munroe によるもので，ハンコックとアダムズが潜んでいたクラーク牧師館へ入ろうとしたリヴィアを，8人の部下とともに館を警護していた Munroe が，音を立てるなと制止した際，リヴィアが発した言葉，"Noise! You'll have noise enough before long. The regulars are coming out" のみである。とまれ，リヴィアは零時から零時半の間に牧師館に着き，

ウォレンのメッセージを伝えたが，約30分後，ドーズも到着した。そして直ちに2人して，コンコードへと警告に向かった。途中，コンコードに住む医者で愛国派のS. Prescottと出会い――彼は，レキシントンのフィアンセを訪れた帰り――，3人でコンコードを目指した。しかし，道の半分，数マイル行ったところで，2人のイギリス兵と出くわしてしまう。リヴィアは他の2人より200ヤード（(1）による。(2）では100ロッド＝550ヤードとされている）先を走っていたため，捕まってしまったが，Prescottは石垣を飛び越えてうまく逃げ出し，コンコードにたどりついて警告を伝えることができた。ドーズもその場から脱出し，レキシントンへと取って返したらしいが，史料には出てこない。ドーズの子孫の言い伝えによると，2人のイギリス兵に追われたが，近くの廃屋までギャロップで駆け，そこでわざと大声を出して，待ち伏せに誘い込んだふりをして，イギリス兵を撃退したとされている。

さて，捕まったリヴィアは，二，三の質問を受け，手を縛られて，先に捕まっていた4人の村人（(1）のみにでてくる）とともに，イギリス兵6名に囲まれ，レキシントンへと移動させられた。集会所まで半マイルのところで，4人の村人は，馬を取り上げられて釈放された。集会所のすぐそばまで来たとき，リヴィアも馬から降ろされ，馬を取り上げられたうえ――かわりに曹長が乗った――，釈放された。通説によれば，リヴィアの馬は疾駆で息絶えたとされているが，(1)，(2）の史料にあるとおり，イギリス兵のものになったのである。さて，徒歩で再びクラーク牧師館へとたどり着いたリヴィアは，まだそこにいたハンコックとアダムズらとともにWobernへ向かって避難するが，その後すぐに，ハンコックの秘書のLowellと2人で取って返し，若干の出入りの後，ハンコックの重要書類をトランクに詰めて，運び出すことになる。そこで，レキシントンの戦いの開始を告げる銃声を，聞くのである。以上が，真夜中の疾駆の具体的な内容であるが，史料（2）は，さらに，Churchなる人物の裏切りの件について，引き続き述べている。

さて，この真夜中の疾駆事件，後世はどのように評価を下すことになるのであろうか。以下，7つの時期に分けて，見てゆくことにしたい。

（2）　英雄への道

①　事件当時

史料（2）でリヴィア自身が述べているように，彼の役割は“intelegence”，すなわち一種の諜報活動であり，それもドーズとの共同作業ということで，当時の新聞でこの事件を，リヴィアの名前入りで報じたのはたった一紙，『ニューヨーク・ウィークリー・ガゼット』紙のみであった。また，1818年，『ボストン・インテリジェンサー』紙にのったリヴィアの死亡記事には，真夜中の疾駆についての言及は一切ない。これへの言及が公の場で初めて現われるのは，1825年，コンコードでの50周年記念式典の際，政治家E. Everettが，史料（3）に出

てくる2人の証言に則っておこなったスピーチで，これが最初の包括的な「疾駆」の説明となった。

② 1860年代—20世紀初め

この時期，リヴィアは英雄への階段を駆け登る。そのきっかけ，というよりも最大の貢献をなしたのは，当時のアメリカ最高の知性，ハーバード大教授にして詩人のH・W・ロングフェローが，1861年1月に『アトランティック・マンスリー』誌に発表した一篇の詩であった。題して“Paul Revere's Ride”。Listen, my children, and you shall hear, Of the midnight ride of Paul Revere... で始まるこの詩は，現在でもアメリカの子供たちの多くが，一度は耳にしたことのある，あまりにも有名な名文である。しかしながら，歴史小説が必ずしも史実の正確な再現でないのと同様に，この詩も，前節で述べた実際の疾駆とは，かなり異なった部分がある。たとえば，“...watch with eager search, The belfry-tower of the Old North Church,” と詩では歌われているが，実際には，リヴィアは自分でランタンの合図を見たわけではなく，合流した友人たちに教えられたのである。また，ランタンの合図の意味自体も，先に指摘したように，異なっていた可能性がある。さらに，“It was two by the village clock, When he came to the bridge in Concord town.” との一文は，明らかに史実と異なっている。リヴィアはコンコードには行けなかったのであり，たどり着けたのは，ひとりプレスコットのみだったからである。この他，ロングフェローの詩には，いくつもの微妙な史実との相違点＝脚色があり，疾駆の忠実な再現とはとうてい言いがたいものであったが，この詩こそ，リヴィアの名を不滅のものとし，一挙に国民的英雄へと祭り上げてしまう。ロングフェローは，疾駆するリヴィアの姿を，“The fate of a nation was riding that night” と形容したが，まさに，「国家の運命」を担った者としてのリヴィア像が，ここに提示されたのである。

1875年，ボストンにおける百周年記念式典のスピーチで，マサチューセッツ州上院議長が，リヴィアを「革命期ボストンの真の英雄」と讃え，4月19日の『ボストン・デイリー・グローブ』紙は，記念の行事として“HANGING OUT THE LANTERNS IN THE OLD NORTH TOWER”の記事を伝えている。ただ，翌20日の朝刊『グローブ』紙は，リヴィアの疾駆の記事で，ドーズの名をEbenezer Dorrと誤記しており，リヴィアの名声が高まるなかで，ドーズの位置付けが，相対的に低下していた様子がよくわかる。

さて，1887年には，E. Porter牧師が，『オールド・ボストン随想』において，「疾駆はリヴィアの最も偉大な業績」と述べ，1891年には，最初の本格的な伝記E. Goss, *The Life of Colonel Paul Revere* が出版された。この頃しだいに「ポール・リヴィアの家」——1680年頃建てられ，1770－1800年の間，リヴィアの所有——が衆目を集め始め，1895年には，

DAR（Daughters of the American Revolution）が記念碑を設置し，1908年4月19日には，改装・修復が完了して，一般公開された。現在でも，ボストン観光，フリーダム・トレイルの目玉のひとつである。また，今日，4月19日は，疾駆を記念する「愛国者記念日 Patriots' Day」で，マサチューセッツ州とメイン州の法定祝日であり，ボストンでは特に Paul Revere Day とも呼ばれるが，この日，あのボストン・マラソンがおこなわれ，その第一回は，1897年であった。さて，1914年4月19日の『ボストン・サンデー・グローブ』紙は，"THE NIGHT BEFORE LEXINGTON" と題した特集記事を絵入で掲げ，真夜中の疾駆についてのかなり正確な情報を提供しており，ドーズについても若干控えめながら，その役割を述べている。翌1915年には，初めてリヴィアの真夜中の疾駆の再現がおこなわれ，以後，慣例化してゆくことになる。

③　1920年代・30年代

この時期，リヴィア像に，少しずつ変化が生じ始める。それはまず，ドーズへの関心というかたちをとって現われた。1920年には，リヴィアとならんでドーズの疾駆が再現され，翌21年4月19日の『ボストン・グローブ』紙は，"TWO RIDERS TODAY WILL GO FROM BOSTON TO LEXINGTON —— 'Paul Revere' from North Sq., 'William Dawes' from Eliot Sq.," "'DAWES' DASHES OVER ROAD FROM ROXBURY TO LEXINGTON" との大見出しのもと，リヴィア役とドーズ役の2人が，疾駆を再現している2枚の写真をのせ，「リヴィアと同様に英雄的な行為が，忘却の淵から救いだされた…」と述べている。一方で，この頃から，リヴィアの疾駆のパロディも書かれ始める。また，誇張された英雄としてではなく，歴史的に客観的かつ冷静なリヴィアの評価もなされるようになってくる。たとえば，1925年4月20日，『ボストン・グローブ』紙の "Nineteenth April, 150 th Anniversary Section"，すなわち150周年特集号では，非常に具体的かつ正確に，写真もふんだんに用いながら当時の状況を再現しており，愛国的な論調の一方で，ロングフェローの詩を全文，挿し絵入りで引用したくだりでは，次のように見出しがおかれている。"POEM THAT MADE REVERE FAMOUS —— Dawes Rode, Too, But 'Paul Revere's Ride' in Longfellow's 'Tales of a Wayside Inn' Celebrated the Deeds of Only One"。また，本稿でも引用した O'Brien の本（1929年）や Morison の論文（1930年）など，リヴィア自身の言葉によって，つまり史料に基づいて，真夜中の疾駆を科学的に記述しようとする論考も現われるようになった。1935年の『ボストン・グローブ』紙上でのブラウン大教授へのインタヴュー記事では，イギリス軍がくる前に，集まった民兵の半数が引き上げてしまったところから，リヴィアの警告は早すぎた，との教授のコメントをのせている。

④　1940年代

この時期は，愛国主義的風潮のもと，パロディは影を潜め，リヴィアのみならず，他の独立革命の英雄たちへの尊敬の念も強調された。大戦中のプロパガンダ，大衆操作の一環としても，リヴィアはしばしば用いられ，愛国者記念日の新聞の見出しには，“‘REVERE, DAWES’ SOUND CALL TODAY AGAINST U.S. FOES,” “PATRIOTS’ DAY RIDERS WARN ‘BUY BONDS!’” などの文字が躍った。

⑤　1950年代・60年代半ば

戦後の東西冷戦構造が，次第にその輪郭を整えるにつれ，愛国主義イコール反共産主義といった構図が生まれ，革命期イギリス軍の俗称Red Coats――その軍服からきた――を共産主義者（Reds）に見立てる見方も出てきた。この時期，リヴィアのメッセージが多様化し，ドーズの再度の見直しもおこなわれる一方で，完全な愛国者としてのリヴィア像を説く子供向けの本も，数多く書かれた。また，1951年の『ニューズ・ウィーク』や1955年の『ライフ』などは，新しいリヴィア像を提示し，銅技術者・実業家としてのリヴィアの方が，ライダーとしてのリヴィアよりも重要である，との主張を掲載した（ただしこれについては，前にふれたMorisonの論文が，すでにリヴィアの多才な側面について，留意を促している。リヴィアの経歴については，略年表参照）。

⑥　1960年代後半―70年代初め

愛国主義の衰退にともない，リヴィアの疾駆もあまり注目を浴びなくなり，1968年の『グローブ』紙にいたっては，「リヴィアは疾駆の際，酒を飲んでいた」などと，史料的には実証不可能な記事を書いている。また，子供向けの本でも，J. Fritz, *And Then What Happened, Paul Revere?* (1973) は，欠点もある生身の人間としてのリヴィアを登場させている。

⑦　現　　在

総じて言えば，醒めた目で，時には皮肉も込めて言及されている，といえよう。たとえば，C. Jones, “What about the Midnight Ride of William Dawes?” in Wallechinsky et al., eds., *The People's Almanac* (1975) では，ロングフェローは，事実を無視してリヴィアを英雄に創り上げたが，靴直し職人のドーズには目もくれなかったと，皮肉たっぷりに述べている。また，V. Dabney, *The Patriots* (1976) では，リヴィアは登場せず，著者は「真夜中の疾駆は重要な事件ではない」とうそぶいている。リヴィアが疾駆で金を貰ったなどと，書きたてている本もある。しかし一方で，今日においても，リヴィアの伝説は再生産され続け

―― それゆえ皮肉やパロディも意味をなす ――，彼はひとつのイメージとして，完全にアメリカ人の記憶のなかに定着しているのである。

（3） アイコンとしてのリヴィア

前節を通じて，真夜中の疾駆，そしてリヴィア自身の評価が，時代とともに変化してゆく様が了解されたであろう。そもそも，歴史的事件・人物の重要度・意味合いなどというものは，その事件・人物そのものではなくて，各時代が決めるものなのである。日本史の例で言えば，さだめし南朝や楠木正成の評価など，その典型であろう。つまり，歴史的事実は，あたかも自然科学の研究対象のごとく絶対的な存在として，時間の流れから超絶して存在しているのではなく，それぞれの時代（時間）に従属しているのである。歴史の相対性原理，とでもいえようか。

さて，その時間の流れのなかで，馬に乗り疾駆するリヴィアのイメージも，星条旗を縫うベッツィと同じく，アメリカ人の集団記憶のなかに定着し，文化的アイコン cultural icon となった。図の7から10を見てみよう。まず図7は，19世紀半ばの folk painting，図8は1905年の sheet music，図9は，現代の，とある砂糖会社のトレードマーク，図10は，チャールズタウンの Boys' Club の少年が，1981年に描いた絵である。いずれも馬とリヴィア，そして教会とが結びついて，ひとつのアイコン（図像）を作り上げており，その一連のイメージで，人々の記憶のなかに定着している様がよくわかる。特に図10は，そのアイコンが次代を担う子供たちに伝達され，再生産されてゆく，まさにその生々しい証拠といえよう。こ

図7

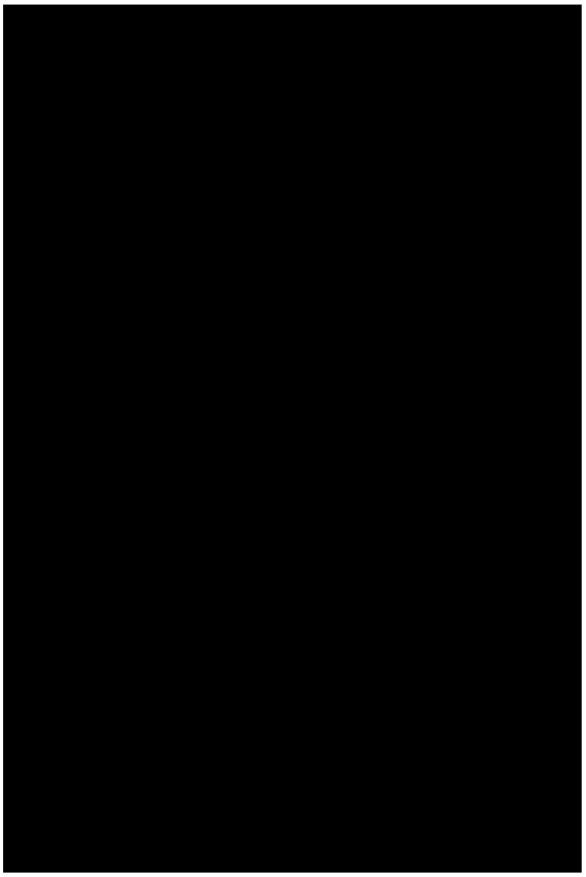

図8

図9

のアイコンを手掛りとして，真夜中の疾駆のストーリーも，伝達・拡大・定着・再生産されてゆくのである。まさに文化的アイコンこそ，民衆文化の側面から歴史を見定める際の，重要な要素であるといえよう。そしてそのアイコンが，「建国神話」と結びついたとき，アイコンは単なるアイコンではなく，人の生死をすら決定する恐るべき力――愛国心――をその身に纏う。リヴィアのアイコンも，ベッツィのアイコンも，アメリカ合衆国という国の持つ，非常に

図10

国粋主義的な側面 —— 湾岸戦争の凱旋パレードにみられるような —— を読み解く，ひとつの重要な視点を提示してくれているように思えてならないのである。

So through the night rode Paul Revere;
And so through the night went his cry of alarm
To every Middlesex village and farm,——
A cry of defiance and not of fear,
A voice in the darkness, a knock at the door,
And a word that shall echo forevermore!
For, borne on the night-wind of the Past,
Through all our history, to the last,
In the hour of darkness and peril and need,
The people will waken and listen to hear
The hurrying hoof-beats of that steed,
And the midnight message of Paul Revere.

—— "Paul Revere's Ride" by H. W. Longfellow

ベッツィ・ロス略年表

1752年	1月1日：フィラデルフィアで，クェーカー教徒の両親のもと，エリザベス（ベッツィ）・グリスコム誕生。
1773年	11月：3人の求婚者（ジョン・ロス，ジョゼフ・アッシュバーン，ジョン・クレイプール）のうち，家具職人の従弟であったジョン・ロスと結婚。夫婦で室内装飾業を営む。
1776年	1月：愛国派として大陸軍に参加していた夫のジョン・ロスが，火薬の暴発で死亡。 ベッツィは家業を続ける。最初の星条旗制作の伝説
1777年	5月：ペンシルヴァニア邦のために海軍の旗をつくり，支払いを受ける。 6月15日：先の求婚者のひとりであったジョゼフ・アッシュバーン（商船の船長）と再婚。
1782年	イギリス軍の捕虜となったアッシュバーンは，イギリスの監獄でジョン・クレイプールと出会うが，疫病で獄死。
1783年	5月：釈放されフィラデルフィアへ戻ったジョン・クレイプール（革なめし工）と，ベッツィ再婚。
1836年	1月30日：ベッツィ・ロス・クレイプール，フィラデルフィアにて死亡。享年84才。

ポール・リヴィア略年表

1734年	ボストンのノース・エンドに生まれる。生家の正確な所在地は不明。父は，ポール・リヴィア，母は，デボラ・ヒッチボーン。
1741年	6才：ノース・ライティング・スクールで読み書きを学ぶ。
1747年	12才：父について銀細工師としての訓練を受けるかたわら，収入のためにオールド・ノース教会で鐘つきとして働く。
1754年	19才：父が亡くなる。長男のポールは，一家の稼ぎ手となる。
1756年	21才：砲兵隊の少尉として，ニューヨーク州北部でのフランス軍との戦いに赴く。
1757年	22才：ボストンへ帰り，セアラ・オルンと結婚する。二人はポールの母親と同居。
1760年	25才：ジョゼフ・ウォレンとの交友始まる。
1768年	33才：画家コプリーのため肖像画のモデルになる。
1770年	35才：「ポール・リヴィアの家」を購入。ボストン虐殺事件の銅板刷りを制作。
1773年	38才：妻のセアラが，8番目の子供の出産後に亡くなる。ラケル・ウォーカーと再婚。ボストン茶会事件に参加。事件のニュースをニューヨークとフィラデルフィアに伝える。
1774年	39才：イギリス軍によるボストン港閉鎖のニュースをフィラデルフィアの第一回大陸会議に伝える。
1775年	40才：4月16日，レキシントンまで馬を走らせ，英国軍がレキシントン進軍の準備をしていることを知らせる。4月18日―19日，真夜中の疾駆（ミッドナイト・ライド）をおこなう。
1777年	42才：ボストン港のキャッスル・アイランドの砦で，戦いを指揮する。
1779年	44才：メイン地方のペノブスコット湾で，砲兵隊を指揮して英国軍と戦うも，惨敗。
1788年	53才：ノース・エンドに鋳物工場を開く。ボストンの技工職人を，新憲法支持に呼び集める。
1792年	57才：鋳物工場でボストン初の教会の鐘を鋳造する。
1794年	59才：リヴィアが製造した大砲を陸軍が購入。
1795年	60才：フリゲート艦オールド・アイアンサイドに使用されるスパイクとボルトを作る。 ブルフィンチの新しい州会議堂の礎石を敷くにあたって援助する。
1798年	63才：マサチューセッツ歴史協会のために，真夜中の疾駆の記述を書く。
1800年	65才：北米最初の銅圧延工場を開く。
1810年	75才：ニューヨークでフルトンが作った蒸気船のボイラーに，リヴィアの銅版が使用される。
1813年	78才：妻のラルケが亡くなる。
1818年	81才：10月10日，リヴィア死亡。グラナリー墓地に葬られる。

和　田　光　弘

参考文献

(ベッツィ・ロス関係)

Frisch, M. "American History and the Structures of Collective Memory: A Modest Exercise in Empirical Iconography," *JAH*, 75 (1989)

Guenter, S. M., *The American Flag, 1777-1924: Cultural Shifts from Creation to Condification* (Cranbury, NJ, 1990)

Jackson, J., ed., *Encyclopedia of Philadelphia* (Harrisburg, 1931-33), pp. 1054-55.

Reynolds, M. A., "The History of the American Flag" (Philadelphia, 1986)

————, "The Legend of Betsy Griscom Ross, 1752-1836" (Philadelphia, 1986)

(ポール・リヴィア関係)

O'Brien, H. E., comp., *Paul Revere's Own Story: An Account of his Ride as told in a letter to a friend, together with a brief sketch of his versatile career* (Boston, 1929)

Morison, S. E., "Paul Revere's Own Account of His Midnight Ride, April 18-19, 1775: With a Short Account of His Life," *Old South Leaflets*, 222 (1930)

Gowing L. D., "Paul Revere's Own Story of That Famous Ride: With Illustrations from Original Drawings" (Boston)

Triber, J., "The Midnight Ride of Paul Revere: From History to Folklore" (Boston)

Larson, S. R., "Paul Revere" (Boston)

The Boston Daily Globe (April 19, 1875), pp. 1-2.

The Globe (AM, April 20, 1875), p. 2.

The Boston Sunday Globe (April 19, 1914), (April 19, 1925), p. 2.

The Boston Globe (AM, April 19, 1921), p. 10, (April 20, 1925), pp. 5-8 (150 th Anniversary Section).